加害者を許すことの出来なかった44年間の苦悩

心理療法士　女性　50代

母・享年49歳。33回忌の法事の時は、兄弟の全員がそうであったように、母不在の33年間の寂しさや悲しさ、空しさ、悔しさが走馬燈のように頭を駆け巡り、33回忌の法事を迎えたことで、やっと自分の心に一つのけじめがつけられた。

当時の私の家は、さとうきびや家畜等で生計を立てながら、一方で母が朝早くから豆腐作りをして家計を支えていた。両親は9人の子育てに追われながらも家族を大切にし、一生懸命働いていた。父は頑固で大変厳しく、物事には細かい人だった。母は何事にも情け深く働き者で、辛い時でも笑いを絶やさず、隣近所からも慕われていた。母の所には人々が集まりいつも賑やかだった。私はそんな母が大好きで、ただ母の側にいるだけで良かった。母の笑顔が見たくて家の手伝いを率先してやったが、両親はそんな私を特に褒めることはなかった。当時の家庭状況では手伝うことが当たり前だったからである。それでも母に褒めてもらいたくて、忙しい母に代わって家事を一生懸命手伝った。が、私の心は徐々に寂しさに耐えきれず、不登校を繰り返すようになった。元々虚弱体質だった私は12歳まで入退院を繰り返し、両親にいつも心配ばかりかけていた。私が小学校6年生の時、私の人生を変えてしまうような惨劇が起こったのである。その日は小雨が降っていて肌寒い日だった。我が家は兄の結婚式当日で、祝賀ムードで一杯だった。披露宴を終え、南部から北部へ向かう途中で悲劇は起きた。私の目の前で、飲酒運転の車が母の乗った車に正面衝突したのである。母は即死であった。あまりのショックな出来事に、私は変わり果てた母の姿を目の当たりにしても、泣くこともわめくことも出来なかった。相手は若い男性で、無傷で事故車の前に呆然と座り込んでいた。

太陽のように明るく、ひまわりのような存在だった母を失った我が家は、一瞬にして暗闇に突き落とされた。良き伴侶を失った父は、毎日酒を飲んでは仏壇に向かって泣いていた。弟、妹二人は夕方になると、母を求めていつも泣いてばかりいた。このことは幼い私にとってもつらく、不憫でならなかった。精神的な支えを失った家族はバラバラになり、夢や希望、人生までも奪われてしまった。父も心労と疲労から倒れ半身不随とな